

## 言葉についての省察 (3)

—— 言語哲学的研究 ——

### Philosophical Consideration on the Nature of Language (3)

大塚 明敏\*・鈴木 宏哉\*\*・葉石 光一\*\*\*

Akitoshi Ohtsuka, Hiroya Suzuki, Kouichi Haishi

#### 第6章 ベンジャミン・リー・ウォーフ (Benjamin Lee Whorf) の説

##### 1 人物について

1897年にアメリカに生まれ、1941年に世を去った本業が保険会社の火災防止技師という異色の言語学者である。

イェール大学でサピア (Edward Sapir 1884~1939) の教えを受け、メキシコの古語であるアズテク語やマヤ語、アメリカ・インディアンのホーピ語の研究に精魂を傾ける。

その過程での「言葉に優劣なし」という彼のヒラメキが今日、言語学の世界においてサピア・ウォーフの仮説 (the Sapir-Whorf hypothesis) とか、言語相対論 (linguistic relativism) と呼ばれるものである。

B・ウォーフは、マサチューセッツ州、ウインスロップで、ハリー・チャーチ・ウォーフ (Harry Church Whorf) とサラ・エドナ・リー・ウォーフ (Sarah Edna Lee Whorf) の長男として出生する。

ウォーフ家は、最初の清教徒移民の直後ぐらいの時期からマサチューセッツ湾岸に住みついた旧家である。

父親のハリーは一時マサチューセッツ工科大学 (MIT) に籍を置いたほどの知的エリートのひ

とりで、社会的には商業デザインの世界で成功した人であった。同時に芝居の脚本も書けば、劇場の演出もする、あるいは、地域の歴史、地質、動植物などの写本に関する研究もするといった幅広い教養人でもあった。

そのせいで、家の中は父親の集めた絵画や書物、化学薬品、撮影用具、その他種々の蒐集物で満ち溢れ、子どもたちにとって素晴らしい刺激的な環境となっていた。

B・ウォーフは早くから絵を描くのが得意であったが、最も熱中したのは、化学薬品や染料などについて実験することや写真を撮ることであった。

小学校からハイスクールまではウインスロップで過ごす、何事にもよく集中して成績も良く、勇気と体力にかけては、弟たちをいじめっ子から守ってやれるだけの頼れる兄貴でもあった。

6歳下の弟、ジョンとは、暗号の秘密を解く遊びなどもよくしたが、弟がどんなに難しい暗号を作っても、それを難なく解読してみせたという。

しかし、独りであるような時には、読書に熱中する少年でもあった。未知なるものへの好奇心や夢はこの時期に培われたものであろう。

1914年にハイスクールを卒業してマサチューセッツ工科大学に進学し、化学工学を専攻する。在学中の成績は、決してぬきんでている方ではなかったという。

大学を卒業してからは、ハートフォード火災保

\*教授

\*\*教授

\*\*\*助教授

険会社の火災防止技術者として1941年に他界するまで22年間にわたり勤務する。

化学工場の業界では有能な技師として広く評判を呼び、大いに信頼されていたという。また、技術者としての才能だけでなく、自分の会社に契約をとるセールスマンとしての才能も抜群であったそうである。

44歳という若さで世を去るまで、これがB・ウォーフの表の仕事であり、本業であったが、それを1日8時間こなしながら、かたわらで、自分の好きな言語学の研究に精魂を傾けたのであった。

その他にも、ハートフォード市に住むひとりの市民としてハートフォード商工会議所の火災防止委員会にボランティアとして参加し、活動していたという。自分の職業としての専門分野の知識や技術を生かしての社会貢献活動である。

B・ウォーフが言語学に眼を向ける発端はどこにあったのかという点、少年の頃プレスコット(Prescott)の書いた「メキシコの征服(Conquest of Mexico)」を読んで、中央アメリカの前史時代に深く興味を抱いたことに由来すると言われている。

その後、大学を出て、ハートフォードに住むようになって26か27歳の頃、科学と宗教の間に存在する矛盾に次第に関心を寄せるようになり、宇宙の進化についての聖書の記述と科学的説明の間には一見喰い違いが見えるが、これを克服する鍵は、旧約聖書を言語学的に精査して解釈すれば分かるのではと考えるようになる。そして、ヘブライ語の研究が必要だということに辿り着く。1924年頃のことである。

しかし、B・ウォーフは、聖書の単なる翻訳に関心があったのではなく、自分で真剣に考えていたところは、人間や哲学の基本問題は、聖書の意味論を新しく探ってみることによって解決できるのではというところにあった。

特に1924年にアントワヌ・ファブル・ドリヴェ(Antoine Fabre d'olivet 1768~1825)によって19世紀初頭に書かれた「ヘブライ語再構(La Langue hébraïque restituée)」を読んで触発され、以降言葉について書かれたものを更に広く、

かつ深く読むようになる。

その延長線上で、1857年に学問的研究のために設立したワトキンソン図書館で豊富な図書を広く渉猟しているうちに大規模なアメリカインディアンの民族学、民間伝承、言葉などに関する蒐集物に出会うという体験ををする。そして、再び、少年の頃夢見たメキシコの古代文化や伝承に興味を抱き始め、1926年には「アズティ語」、1928年からは「マヤ語」の勉強と研究を独力で開始する。いよいよ言語学者、B・ウォーフの登場である。

1928年のアメリカニスト国際会議でエドワード・サピア(Edward Sapir 1884~1939)と出会い、1929年から1930年の間にいろいろな会合でサピアと話す機会を得る。

この出会いの結果、アメリカインディアンの言葉の研究を進展させたいという意欲を益々つらせることとなる。

サピアは、当時、既にアメリカインディアンの言葉だけでなく、一般言語学の上でも、言語学の世界においては、絶対の第一人者であった。B・ウォーフの方もサピアの著書である「言語(Language) 1921」などを読んで、サピアの研究や業績を十分承知していたであろうと思われる。

1931年にサピアがシカゴ大学からイェール大学に移り、人類学の教授として言語学を教えるようになった時、B・ウォーフは、ただちにイェール大学でのサピアの最初のアメリカインディアンに関するコースに登録して教えを受けることにする。

1937年から1938年にかけてはサピアの引き立てによりイェール大学の人類学講師をも務めている。サピアのB・ウォーフに対する学問上の期待も大きかったのではなかろうか。

サピアは、ユート・アステク語族についての研究の拡充と、アズテク語と遠い親戚関係にあるホービ語の研究を進めることをB・ウォーフに提言する。

B・ウォーフは、幸運にも、ニューヨーク市でホービ語のネイティブ・スピーカー(その言葉を母国語として用いている人)と接触することができた。

1932年の春以来、サピアがB・ウォーフのた

めを取ってくれた少額の研究助成金を得て、彼は、サビーアから手ほどきを受けた実地研究の方法を利用しながらホーピ語の研究に熱心に取り組んでいく。

B・ウォーフと彼のインフォーマント（調査対象）とは、ニューヨークとウェザフィールド（ウォーフが当時住んでいたところ）との間を訪れ合うということをする。

アリゾナ州のホーピ族保護地域にしばらく滞在する機会も得て、1935年までには、ホーピ語についての一応の文法書と辞書を完成する。

その過程の中で、B・ウォーフは「ホーピ語の風変わりな文法は、ホーピ語の話し手が物事の知覚や把握をヨーロッパ人とは違ったやり方で行っていることを示すのではないか」という考えを抱き始めていた。そして全体として言葉の違いそのものが、物の見方そのものにまで影響を及ぼすことを実証したのであった。

## 2 言葉の本質のとらえ方について

以下に述べることは、B・ウォーフのフィールドワーク（実地調査）を踏まえたホーピ語を中心とするアメリカインディアンの言葉に関する研究に見え隠れする言葉というものに対するとらえ方（言語観）を筆者たちなりに分析・抽出したものである。

- 言葉は、文化であり、両者は共通の形而上学（哲学）を秘めているものである。
- 言葉は、その構造と文法の中に、その民族の文化と行動を投影するものである。
- 言葉は、宇宙的な規模のものを指すような表現（世界観）や、それ自体の中にまだ体系化されていない哲学の基本的な前提を結晶化して表わしているような表現を含んでいるものである。
- 言葉は、一つの民族、一つの文化、一つの文明によって担われている思想、ことによっては一つの時代の思想すらも表わすものである。

- 言葉は、文化的な現象が特に緊密な構成体をなしている一つのまとまりである。
- 言葉は、厳密なパターン構成を有する心的機能である。
- 言葉は、人間の思考や感情の媒体である。
- 言葉は、人間の思考を活性化し、方向づけるものである。
- 言葉は、用いること自体が複雑な文化体系の利用を意味するものである。
- 言葉は、眼に見えない、姿のない思想の計り知れない空白としか思えなかったさまざまな力を、正確に焦点さえ合わせれば、たいていその「真の姿」で映し出してくれる鏡である。
- 言葉は、人間の身体的な行動全体が象徴化し、ついでその象徴性を次第に音声的手段に向けることによって発達したものである。
- 言葉は、人間の行動や文化の一部であり、特別なものである。
- 言葉は、途方もなく複雑な構造体である。
- 言葉は、複雑な暗示的構造を有するものである。
- 言葉は、いずれの民族の言葉も複雑な網の目のような前提を有するものである。
- 言葉は、いくら粗野な野蛮人の言葉であろうとも、その働きを記述するのに偉大な学者が一生を研究に費さなくてはならないほど複雑なものである。
- 言葉は、当然のことではあるが、それを母国語とする人にとっては易しく思えるものである。

- 言葉は、その目ざましい発達という点で思考の発達と相まって人間と他の動物とを区別するものである。
- 言葉は、思考作用と密接に結びついていて、思考過程に影響を与えるものである。
- 言葉は、人間の進化の産物である。
- 言葉は、どんなに粗野な野蛮人であっても苦もなく無意識のうちに操作することができるものである。
- 言葉は、世界中の民族全てにおいて優劣なく、皆同格である。  
少数の印欧語こそ言葉の進化の頂点に位置するという主張は、ヨーロッパ人の偏狭な言語的偏見に過ぎない。  
要するに言葉は言葉である限り皆平等にとらえて当然のものである。
- 言葉は、人間が現実の社会生活に適応するための基本的な手段である。
- 言葉は、人間の現実世界の大部分を無意識的に形づくっているものである。
- 言葉は、現実の反映である。
- 言葉は、人間が大体一定のやり方で聞いたり、見たり、あるいは、経験したりする背景にあって働くある種の解釈である。
- 言葉は、人間の住む客観的世界や社会的活動の世界を支配するものである。
- 言葉は、伝達や思考のための手段以上の存在である。
- 言葉は、人間の文化や心理と密接な関係をもつものである。
- 言葉は、文化的なものにせよ、個人的なものにせよ、他の行為に対して影響を及ぼすものである。
- 言葉は、人間が与えられた経験であるさまざまな現象を日常的なやり方で分析、整理する場合のある一定のやり方である。
- 言葉は、その場面や状況をある程度分析分類し、その集団の言語習慣に基づいてはば無意識のうちに築かれた世界の中に位置づける働きをするものである。
- 言葉は、それからの類推によって、ある一定の型の行動をひき起すことがしばしばあるものである。
- 言葉は、経験を解釈し、叙述するものである。
- 言葉は、思考の世界を規定し、人間の無意識的な反応までをそのパターンにはめ込み、特定の典型的な性格をつくりだすものである。
- 言葉は、人間の行動や文化と網の目のように結びついているものである。
- 言葉は、文化と互いに影響し合いながら、どちらが先に来るといふのではなく共に発達してきたものである。
- 言葉は、自然に一つの体系をなしているものである。
- 言葉は、集団の精神を表すものである。
- 言葉は、構造や意味、体系であれ、ゆっくりと変化するものである。
- 言葉は、経験をいかに分析し、報告するかを決める切り口や切り方である。
- 言葉は、経験の諸項目の分類の仕方を暗示するものである。

- 言葉は、自然の分割の仕方を暗示するものである。
- 言葉は、運動、色彩、形態の変化という点で、とどまるところを知らぬ自然のおもてをいかに分節するかを暗示する何かである。
- 言葉は、文化と同じように歴史を有するものである。
- 言葉は、年齢的に幼児期を過ぎた正常人であれば、誰でも話すという形でそれを使用することができるものである。
- 言葉は、それを使用することが無意識に自動的に行なわれるものとして身につけてしまっている習慣である。
- 言葉は、単に考えを表明するだけの手段ではなくして、それ自身、考えを形成するものである。
- 言葉は、個人の知的活動、すなわち、自分の得た印象を分析したり、自分の蓄えた知識を総合したりするための指針であり、手引きである。
- 言葉は、さまざまな印象の変転きわまりない流れとして提示されている世界という自然を分割し、概念の形にまとめあげ、現実に見られるような意味を与えていく枠組である。
- 言葉は、測り知れないほどの古い時代から伝えられてきたものである。
- 言葉は、ごく幼い頃に無意識のうちに身につけるものである。  
したがって人間は努力なしに話すことができるのである。
- 言葉は、その背後に伝統的に「精神」と呼ばれてきたようなものを持っていないとは言いきれない存在である。
- 言葉は、シンボルとして王様にも似た役割を果たすものである。  
ある意味では意識のもっと深い層での過程の表面を覆う刺しゅうのようなものであり、そのように覆われた過程はいかなる伝達や合図、象徴行為の行なわれる場合でも、その前提として必要なものである。
- 言葉は、できごとの拡がりや流れをその人なりのやり方で分節し、体系化する枠組である。  
その理由は、母国語を通じてそのようにすることにお互いの合意があるからであり、決して自然そのものが全ての人にそう見えるように分節されているからではないのである。
- 言葉は、使う際にはほとんど努力なしに自分の用いている極めて複雑な機構に気がつかないでいるものである。
- 言葉は、どのような民族の言葉であれ、パターンからなる大規模な体系であり、かつ異なっているものである。  
その体系の中には、伝達をする場合の手段としてだけでなく、自然を分析し、どの型の関係や現象に注目するか、あるいは無視するか、そして、推論を媒介し、自らの意識の住み家を作る際に人間が手段とする形式や範疇が文化的に規定されて組み込まれているものである。
- 言葉は、連続した存在の拡がりや流れを人工的に切りきざむものである。  
ただし、その区分の仕方は、それぞれの民族の言葉によって異なっている。
- 言葉は、語でなく、文である。  
語が何を指すかは、それが用いられる文と文法的パターンによって規定されるものである。
- 言葉は、経験や意味との関連において代数の X、Y、Z のような性格をもつものである。
- 言葉は、物事を認識する際、背景にあって働くものである。

- 言葉は、今日では崩れて土と化しているものとも古い廃墟よりも遥かに古い昔にその進化の過程を完了し、その誇らしげな完成した姿をもって、この地上のあちこちへと拡まったものである。
- 言葉は、語い過程を通じて話し手にある種の漠然とした心的感覚をもっと明確に意識させるものである。  
それによってそれ自身よりさらに低い面における意識が現に生み出されることもある。というように言葉は魔法のような性質の力を持っている。
- 言葉は、不連続な語いの分節と、配列されたパターン構造とから成り立っており、そのうち後者の方が背景的な性格のもので、明白度の点では劣るが、より破壊されがたく、普遍的な性格のものである。
- 言葉は、人間が現実を理解する仕方と、人間のそれに対する振舞い方に影響を与えるものである。

## 第7章 S.I.ハヤカワ(S.I.HAYAKAWA) の説

### 1 人物について

1906年、カナダのバンクーバーにおいて数少ない日系住民の子として誕生する。その後ロッキー山脈の東、草原地帯の外れにある小都市カルガリー市で初等教育を受ける。

幼い時分、家庭で日本語を教わるが、小学校へ入学する頃からはほとんど英語の環境の下で育つこととなる。

彼が8歳の時、両親は家庭教師をつけて日本の文化と日本語を学ばせようとするが、本人がこれに抵抗したため、その成果は不首尾に終わる。

1927年、マントバ大学を卒業、その後、モントリール大学にて英文学と哲学を学び、さらにウイ

スコンシン大学で英米文学を学んで学位を獲得す

る。  
1936年にウイスコンシン大学の教員となり、地域の都市で講義をしている中に「世論と宣伝」とか「意味論」の研究に興味を持つようになってくる。

1941年、「行動における言語(Language in action)」を世に問い、一般意味論(General Semantics)運動のリーダーの人物の一人として活躍する。

1949年には、前著の改訂、充実版である「思考と行動における言語(LANGUAGE IN THOUGHT AND ACTION)」を発行し、国際一般意味協会(The International Society for General Semantics)の機関誌ETC(季刊)の編集長をもつとめる。

彼が学問的な意味で最も影響を受けたのはアルフレッド、コージブスキーの一般意味論—非アリストテレスの体系—(General Semantics “non-Aristotelian system” of Alfred Korzybski)からである。

その他、意味論のOgden and Richards、言語学者のLeonard Bloomfield、心理学者のJean Piaget、言語病理学者のWendell Johnson、哲学者のSusanne Langer、Sigmund Freudを軸とする心理学者や精神病理学者であるKarl Menninger、Karen Horney、Carl R Rogers等からも大きな影響を受けている。

こういった学問領域の人々に加えて、文化人類学者であるBenjamin Whorfや、Ruth Benedict、Margaret Mead等にも影響を受けている。

彼は、意味論、記号論、言語学、哲学、心理学、文化人類学、社会学(含態度調査、世論研究等)、精神病理学、精神分析学、最新の心理療法、生理学、神経学、サイバネティクス(cybernetics)等の学問領域を統合して、人間の生きた言葉と、実際生活の場の中でそれが人間相互のコミュニケーションにおいて果たすはたらきを研究し、検証しようとしたのであった。

これが彼の主張する言葉の意味論的研究であり、その大成が1949年に発行された「思考と行動における言語(LANGUAGE IN THOUGHT AND ACTION)」である。

意味論自体のとらえ方としては、ハヤカワ自身

直接的には次のように述べている。

「意味論は、人間の相互作用を言葉のコミュニケーションの機構を通して研究するものである。」

「意味論的洞察——即ち、人間の記号的行動と記号的機能を通しての人間の相互作用の洞察」

またハヤカワの「LANGUAGE IN THOUGHT AND ACTION」の訳者である大久保忠利の解釈によれば、「意味論」は次のようなものとなる。

「人間生活に最も大きな役割を果している言葉について、人間が無意識に作用を受けているその機能や、その用法について、これをはっきりと研究の対象とする科学である。」

「言葉が、われわれ自身に、また他の人々に、いかにはたらくかについての生きた知識を抽出するための研究である。」

「一般意味論 (General Semantics) は、特に言葉と人間を研究の対象とする科学である。」

「一般意味論は、言葉（その他の）という記号に対する人間の反応の研究である。」

「言語的記号 (linguistic symbol)、その他の記号に人間がいかに対応するかを研究することである。」

等々のとらえ方もあるが、うがった見方をすれば、ハヤカワの言葉に関する意味論的研究や言語学は、「実用言語学」や「臨床言語学」「応用言語学」「言語生態学」、あるいは「プラグマティズムの言語学」とでも命名したほうが実体に即しては、ふさわしいようにも思えるのだが。

## 2 言葉の本質のとらえ方について

以下に述べることは、ハヤカワの大学教師、サイコセラピスト、デザイン研究家、民衆音楽研究家、ジャーナリスト、etc、家庭においては2児の父という生活実践を踏まえた意味論的研究の叙述

の中に見られる言葉に対するヒラメキや洞察を筆者たちなりに分析抽出したものである。

- 言葉は、人間のより良き生存にとっての有用な手段である。
- 言葉は、社会、あるいは前の世代から人間個人にタダで渡された財産である。
- 言葉は、人間がコミュニケーションをする際の手段である。
- 言葉は、聞き手と話し手の間のコミュニケーションの手段である。
- 言葉は、ある個人が自分の経験の補ないに他の人の経験や神経体系を利用する際の媒体である。
- 言葉は、動物の用いる僅かの限られた叫びに比べて、極めて複雑な体系を有するものである。
- 言葉は、人間の神経体系に起っていることを表現したり、報告したりする手段である。
- 言葉は、元々は動物の呼び声より発展したものかもしれないが、それより遥かに柔軟な構造や働きを有するものである。  
人間の神経体系に起っている非常に変化に富んだ事柄を報告できるだけでなく、それらの報告を報告することもできる。
- 言葉は、報告についての報告であり、叙述についての叙述である。  
たとえば、ひとりの人が「川が見える」と言えば、それを聞いたもうひとりの人が「川が見えると言ってるよ。」と更にもうひとりの人に伝えることもできる働きをするものである。
- 言葉は、人間個人々々が考えたり、聞いたり、話したり、読んだり、書いたり、行動したりする中に存在するものである。

- 言葉は、他の人の経験や知識を学び、利用するための手段である。
- 言葉は、先人の経験や知識という遺産を受け継ぎ、そこを出発点として、それを更に進歩、発展させるための手段である。
- 言葉は、人間が協調、協力する際に必要とされる手段である。
- 言葉は、人間関係のいろいろな事態において意見の一致や賛成をもたらすのに必要とされる手段である。
- 言葉は、人間の知識や経験をプールする大きな協同倉庫であり、すべての人に利用され得るものである。
- 言葉は、社会的なものであり、人間の文化的、知的協同を可能にするものである。
- 言葉は、人間の生活にとって欠くことのできない機構である。  
われわれの人生は、同じ人間の過去の経験の集積によって型にはめられ、導かれ、豊かにされ、充実したものとなっていくが、それをすみずみにわたって支えているのは、実は言葉や読み書きの能力である。
- 言葉は、社会が活動するために必要とされる努力の協同を達成可能にするものである。
- 言葉は、人間生活のあらゆる面、あらゆる事柄に織り込まれているものである。
- 言葉は、知識を交換したり、伝来の知識を伝えたりする手段である。
- 言葉は、聞いたり、使ったりすることによって、人間が気がついていないかいはともかくとして、常に人間自身に影響を及ぼすものである。
- 言葉は、ある言葉にまつわる無意識の仮想であっても人間の行動に影響を及ぼすものである。
- 言葉は、その人自身の使い方と他の人が話した時の受け取り方によって、その人の信念や先入観、理想、抱負等を大きく形成するものである。  
そして、それらは、意味論的環境と呼ばれるその人の生活する知的・道徳的雰囲気構成するものとなってくる。
- 言葉は、人間が森羅万象を表すために任意に決めた記号である。
- 言葉は、ふたりかそれ以上の人間が互いに同意して、何かを何かの代わりにすることにした記号の一種である。
- 言葉は、人間同志が同意した記号の体系である。
- 言葉は、記号表示のあらゆる形式の中で最も高度に発達し、最も精巧で、最も複雑なものである。
- 言葉は、事物ではなく、その象徴である。  
それは、地図が現地そのものでないのと同様の関係である。
- 言葉は、事物から独立したものである。
- 言葉は、人間が、両親、友人、学校、新聞、書物、会話、講演、ラジオなどから知識の大部分を獲得する際の不可欠の手段である。
- 言葉は、人間にとって客観世界や人生の地図である。
- 言葉は、人間が、報告や報告の報告を通して知識を受け取る際の手段である。
- 言葉は、人間が、報告からなされた推論や、



他の推論からなされた推論、推論の推論を受け取る際の手段である。

- 言葉は、子どもが5、6歳になるまでに道徳や、地理、歴史、自然、人間、遊戯などについてのまた聞き、またまた聞きの知識の蓄積がすべて集まって、言葉の世界として形成されるものである。
- 言葉は、人間に伝えられる文化的遺産という科学上の、また人間関係の社会的にプールされた知識、すなわち、経験の地図である。
- 言葉は、ある音声と対応したある意味との結びつきによって構成されているものである。  
したがって、違った音声は、違った意味を持つこととなる。
- 言葉は、人間が知識を交換するために行なう記号的活動の手段である。  
基礎的な記号的活動は、人間が直接、見たり、音を聞いたり、感知したりしたことの報告である。  
具体例  
「道の両端には溝がある」  
「湖の向う側には魚はいないが、こちら側にはいる」  
次に報告の報告という間接的な記号的活動による知識の交換がある。  
具体例  
「世界で最も長い瀧はローデシアのヴィクトリア瀑布である」  
「新聞の伝えるところでは、エヴァンスヴィルの近くの公道41号で大衝突があった」
- 言葉は、人間同志の信頼と同意を前提として成立するものである。
- 言葉は、人間の行動の孤立した現象ではなく、その背景をなす非言語的出来事の全体的な文脈を背景や基盤として生きて働くものである。

- 言葉は、人間関係を円滑に展開するための不可欠の手段である。
- 言葉は、その意味のほとんど全てを辞書や定義から習うのではなく、その言葉を、人生の実際の状況に伴なって聞き、ある音声がある状況と連合させて習うものである。
- 言葉は、外在的意味、すなわち外延と内在的意味、すなわち内包とを有するものである。  
外在的意味（外延）とは、言葉が代表している言葉で言い表わせないあるもの、すなわち、事物のことであり、内在的意味（内包）とは、人の頭の中に想起しているもので、頭の中である語の意味を他の語を使って言うような作用である。
- 言葉は、文脈の全体に基いて相手方に解釈され理解されるものである。
- 言葉は、人間が下等な動物同様に餓え、恐れ、淋しさ、勝利、性的欲求などの内的状態を呼び声で表出するところから発展したものである。
- 言葉は、感情を表出する前記号的要素と正確な報告を送る記号的要素の混合したものである。  
多くの言葉は、苦痛の叫び、怒りに歯をむき出す、友情を表わすために鼻をすり寄せる、喜びに踊り廻る等の表出的身振りを等価のものとして音声で置き換えたものであるが、これを言葉の前記号的用法と呼んでいる。  
こういった前記号的用法は記号的体系と共存し、日常生活で用いられる言葉というものは、それらが全く混合したものである。  
言葉の持つ前記号的要素が最も明らかになるのは強い感情を表出する時である。  
もし、人が歩道から不注意に踏み出した時に自動車がやってきたら、「あぶないっ!」「気をつけろ!」「やい!」「どけっ!」、またはただの叫び声を上げようと、その時に出した音声は、警告するために必要な高い声を出したまでのこ

とである。この場合、必要な感覚を伝えるのは、叫び声の高さと調子だけで記号としての言葉ではない。

同様に鋭く怒った調子での命令は、同じ命令を低い声で出すよりも、一般に、より早い結果を出すことができる。

ここでは、音声の質自身が、使われた記号とは殆んど独立して感情を表出する力を発揮しているのである。

その他、「また、いらっしゃい」と言っても、声の調子で、お客が二度と来ないようにとの希望を示すこともできる。

また、若い女性と散歩している時に、彼女が「いい月ねえ」と、言ったら、その声色で、単なる気象学的観察の報告をしているのか、それともキスを求めているのかがわかる。

幼い子どもは、母親の言葉を理解できるようになる遥か以前に母親の声の中での愛、温情、怒り等の感情を理解する。

そして大いの子どもは、言葉の中にあるこういう前記号的感受性を残したまま育つものである。

人によっては、年齢と共にこの感受性を一そう磨き、直感力や他人より優れた能力を持っていることで周囲から信用される人となってくる。

こういった人たちの才能は、話し手の声の調子、顔の表情、その他の内的状態の徴候を解釈する業にある。こういう人たちは、何が言われたかを聞くだけでなく、いかに言われたかまで聞きわけるのである。結果として、言葉の前記号的側面にまつわる情報まで活用してより正しい判断に導くことができるようになるわけである。

- 言葉は、話すこと自体を自分で聞いて楽しむためにも用いられるものである。

それは、人々がゴルフやダンスに興ずるのと同じ理由によるものである。

子どもたちがワーワー言ったり、大人たちがお風呂で歌うのも同じように自分の声を楽しんでいるわけである。

こういったことも実は、言葉の前記号的側面

の活動であり、働きである。

時には大勢で一緒に声を上げて合唱したり、斉唱したり、讚美歌を群唱したりすることもあるが、これもまた言葉の前記号的側面のなせる業である。

- 言葉は、一種の社交機能を果たす手段である。

典型的なものに社交的会話があるが、その性格は大いに前記号的なものである。

例えば、お茶の会や晩さん会では、天候のこと、シカゴ・ホワイト・ソックス（球団）、トーマス・マンが最近出した本、イングリッド・バーグマン（イギリスの有名な映画女優）の最近の映画など、色々なことについて話をしなければならない。

これらの会話に特徴的なことは、極く親しい友人同志の間以外では、それらの話題について話すことは、何か情報としての価値を有するほどの重要な事項は余りないという点である。

しかも、そこでは黙っていることは失礼とされる。

また、挨拶や別れの言葉である「お早よう」「いいお天気です」「皆さんいかがですか？」「お会いできて嬉しいです」「また、こちらにおいででしたらお立寄り下さい」などは、本人がそう思っていなくても言わないのは社会的失策とされる。

というように日常、言わないのは失礼だというので、あえて口をきく場合は無数にある。

各種の社会的グループは、それぞれの形式のこうした話し方を持っているものである。

そういうことで、「座談のやり方」とか、「お喋り」「ほめ合い」はアメリカ人の特に愛好するところである。

こういった社会的実践から、一般原則として、次のようなことが言える。

「黙っていないようにすることも、言葉の重要な機能である」

社会では人が何か「話すべきことがある」時にだけ話す、というわけにはいかない。

この社会的会話である前記号的言葉は、動物

の叫びと同じく一種の行動である。

人はなんでもないことを話し合い、それによって友情を築き上げる。

話の目的は、話しの内容の意味により何かの知識を傳達するというより、親交を深めるといふことにある。

人間は、親交を結ぶための種々の方法を有している。一緒に食事をする、ゲームをする、共に働くなど。話しを一緒にするというのもその一つである。

ということになると、社交的会話においては話を一緒にするということが第一の目標で、内容は第二ということになってくる。

したがって、話題の選択にも原則が必要とされてくる。親交を結ぶことが目的であればお互いに一致が直ちに得られる話題を注意して選ぶべきである。

ふたりの初対面の人が互いに話しをする必要を感じたとする。

A 「良いお天気ですね」

B 「良いお天気です」(一つの点で一致が得られた)

A 「この夏はお天気が続きますなあ」

B 「よく続きます。春もようございました」(二つの点で一致が得られた。第二の一致は第三の一致を招く)

A 「いい春でした」(第三の一致に到達)

このように一致は話すことだけにあるのではなく、触発されて発表する意見にも見られる。

天候について一致が得られたら、次の一致に進む。

「ここいらは農作物のよくできる地方だ」とか、「物価が上がって困る」とか、ニューヨークは行って見るには良い所だが、住むには向かない」とか。

このようにして、新しい一致が得られる度に、どんな平凡なきまりきったことであろうとも、初対面の恐怖と懸念は拭い去られ、友情の可能性が増してくる。

更に話を進めるうちに、ふたりの間に共通の友人があったとか、政治的見解や趣味・道楽で共通だったとかいうことが明らかになり、友だちとなり、本物の交際と協同が始まることと

なってくる。

- 言葉は、自分を相手の人にわかってもらい、安心させる手段である。

これも言葉の前記号的用法の一つである。

- 言葉は、友情や親交を育む手段である。

これも言葉の前記号的用法の一つである。

- 言葉は、話をつなぐ手段である。

これも言葉の前記号的用法の一つである。

知り合いたちは特別に話し合うことがなくとも、話し合うことを好む。

同じ家に住む人々、同じ事務所に働く人々は、大して用もないのにいつまでも話し合っている。

その両方の場合とも退屈しのぎという目的もあるけれど、一つには、更にこれが重要なのだが、話しをつないでおきたいのである。

人間は、話がつながっていなければ、縁がなくなっていないような気がするものである。

- 言葉は、人間の儀式的行動において社会的結びつきや一体感を再確認する手段である。

これも言葉の前記号的用法の一つである。

その言葉は、音声のお決まりの組合せで、知識は伝達しないけれども、感情が(しばしば集団の感情が)附随しているものである。

典型的な例は、宗教的儀式で、牧師か坊さんが何か述べるが、それは大てい集まっている人々にわからない言葉である。(ユダヤ教ではヘブライ語、ローマ・カトリックではラテン語、中国や日本の寺ではサンスクリット)、その結果、出席者には何の内容も通達されない。

それでもキリスト教徒が教会を出る時には、どんなお説教だったかもうはっきりと覚えてはいないとしても、「何か良かった」という感じになっている。

「何が良かった」のかといえば、クリスチャンは仲間のクリスチャンに、アメリカ人はアメリカ人に、フランス人はフランス人に、自分の宗派の儀式に参加した結果、一そうの結びつきを感じるのである。それぞれの社会は、ある一

組の言語的刺激に対して共通に反応するというこのような絆によって結びつけられているわけである。

- 言葉は、社会の構成員を結びつける絆である。
- 言葉は、話し手が直接感情を表出する手段である。

- 言葉は、聞き手の感情に感化を及ぼす力を持つものである。

その場合における

- ① 第一の感化的要素は、声の調子、その高さ、柔かさ、楽しさ、不愉快さ、発言の過程における声量と抑揚の変化である。

- ② もう一つの感化的要素はリズムである。  
リズムとは、ある一定の間隔での聴覚的刺激の繰り返しによる効果に与える名称である。

リズムは非常に感化的で、人が注意を乱されたくない時にさえも注意をとらえてしまう働きをする。

- ③ 音声とリズムに加えてもう一つの重要な感化的要素は、快、不快の感情の雰囲気である。

それは、あらゆる言葉に影響するものである。

- 言葉は、その性質上用具的 (instrumental) なるが故に、使われる目的によって、通達的内包 (informative connotations) と感化的内包 (affective connotation) を持ち得るものである。

通達的内包とは、社会的に同意された非個人的意味 (impersonal meanings) である。

例えば、動物のブタを説明するのに「四つ足、哺乳類の家畜で一般にブタ肉、ベーコン、ハム、ラードを取るために農家で飼われるもの」というような場合、

感化的内包とは、それが惹起する個人的感情

(personal feelings) の雰囲気、例えばブタに対して「ああ、あの小屋でブブブ言っている汚ない、臭い動物か」など。

- 言葉は、感情表出のすべてにわたって語の持つ感化的内包をある程度利用するものである。  
人が強く感動すると、その感情をそれにぴったりの感化的内包を持つ語 (言葉) によって表出する。

その語の持つ通達的内包には注意を払わずに。腹を立てた時、人を「オオカミ」とか、「クマ」とか、「イタチ」とか呼び、愛する時には「ハニー (蜜)」とか、「ハト」とか呼ぶ。

- 言葉は、すべてその使い方で、感化的性格を帯びるものである。

ある人を「あの紳士」「あの人」「あの男」「あいつ」「あの野郎」などと呼ぶことがあるが、その人は同じ人であり、そういった呼び方は、その人に対する他の人々の感情の差異を現わしている。

- 言葉は、その感化的内包が、その社会にとって不快か、望ましくないかのために、使おうとする時にも使えず、むしろ注意して使うのを避けなければならないというものも沢山あるものである。

ある社会では、食うことについて語る事が失礼となり、生理や性に関係のある言葉は、たとえ、僅かにそれを暗示する言葉であっても感化的内包を伴っているというので使ってはいけないことになっている。

こういうものを「言語的タブー」と呼んでいる。

- 言葉は、われわれがひどく腹を立て、その怒りを荒っぽく表出する必要がある時、荒れ狂って家具をこわしたりする代用となり、感情表出の危機に際して一種の安全弁の役をするものである。

- 言葉は、人間にある行為を起こさせる手段である。

「命令」とか「要求」とか「指令」とか呼ぶものは、言葉によってある事を起こさせるための最も単純な方法である。

「この候補者は偉大な人物である」と述べて他の人々に投票するように影響を与えるような遠廻しの方法もある。

- 言葉は、人間の未来の活動を調整し、指導し、影響を与える道具である。
- 言葉は、まだ現地が実在しないにもかかわらず、その地図を作成可能とする道具である。
- 言葉は、あるべき現地の地図よりわれわれ自身を導いて、未来の出来事にある予告可能性を与えることができる道具である。
- 言葉は、未来の出来事の調整を可能にする道具である。
- 言葉は、人間を社会で同意された行動の型 (patterns of behavior) である社会的公民的習慣に従わせるための調整 (control) の手段である。
- 言葉は、何についても全てを言い尽くすことができないものである。  
例えば、指令的な言葉に含まれた約束も「あるべき現地 (想定された現地)」の「あらまし」の地図以上には出ないものである。  
それどころか未来は、それらのあらましに予期しないしかたで細目を描くことがある。時には、未来は、われわれの想定する「地図」に全く関係なく展開するかもしれない。しかも、約束した出来事を実現しようとするわれわれのあらゆる努力にもかかわらずである。  
しかし、それはそれなりに指令が必ず未来に完全に型をはめることはできないということの理解は、われわれに不可能な期待を持ち、不必要な失望を味わわないですませるという効用ともなっている。
- 言葉は、意味のとり方によって、その作用が

大きく変わるものである。

「ボーイ・スカウトは清潔で忠誠で勇敢である。」

「警官は弱い者の味方である。」

という説明は、あるべき目標を示したもので、必ずしも「現在の状況」を述べたものではない。

ところが、人は、こうした定義を描写的 (descriptive) なものと考え、そのため、あるボーイ・スカウトが忠誠でなかったり、ある警官が弱い者いじめだったりすると驚き、恐れて幻滅を感じがちである。

そして、人は、「ボーイ・スカウトはこりごりだ」とか、「警官には呆れた」とか決めてしまったりするが、これは見る側の間違いである。

- 言葉は、しばしば理解する側が意味を不適当にとってしまう、そこで言われていないことまでも読み込んでしまう場合があるものである。
- 言葉は、感化的コミュニケーションの媒体である。

「私がオーディトリイ・イマージネーション (auditory imagination) と呼ぶものは、音節とリズムに対する感じで、それは、思考と感情の意識的なレベルのはるか下まで滲み透り、あらゆる語に生気を与えている。それは、最も原始的な忘れられた所に潜り込み、起源に立ち返り、何かを持ち帰り、初めと終りを探し求める。それは正に意味を貫いて作用し、あるいは、いわゆる意味を伴ない、古い、忘れられたものと陳腐なもの、現行のもの、そして、新しいものとを融合させ、最も古めかしい精神と最も文明的な精神とを驚かす。」

T・S・エリオット

このような影響が感化的コミュニケーションである。

- 言葉は、協力して社会を作ろうとする人々の間の愛、友情、公共性等が確立する前にまず必要とされるある人と他の人の間に流れる一脈の共感性 (sympathy) を育む媒体である。

- 。言葉は、場合によっては、人間に催眠術的効果を及ぼすものである。

耳ざわりの良い演説、長々とした話、もったいぶった態度というものは、話の内容にかかわりなく、聞く人に対して結果において感化を及ぼすものである。

印象的な言葉で綴られた説教、演説、政治的雄弁、文章、美文を、読んだり聞いたりしている時には、われわれは批判的であることを全くやめて、話し手・書き手が思う通りに、興奮したり悲しんだり喜んだり怒ったりしていることが多い。

まるで蛇使いの笛に魅せられた蛇のようにわれわれは言語的催眠術の音楽的章句に支配されている。

- 。言葉は、われわれが互いに知識を交換し、観察したことをプールし、人類の環境を集団的に調整できるようにする媒体である。

- 。言葉は、人間の記号的経験 (symbolic experience) を豊かにする最高の手段である。

実際、良い文学を読んだ人々は、読めない人々、読もうとしない人々よりも、より多くより豊かに人生を生きただことになる。

読書は他の人々が人生についていかに感じたかをわれわれに感じさせる。たとえその人々が何千マイル離れた所、何百年前の人々であろうとも。われわれは自分のみのもただ一つの人生しか生きられないと考えることは正しくない。われわれは本を読みさえすれば、望むままに更に幾つもの人生でもどんな種類の人生でも生きられるのである。

- 。言葉は、外在的世界と人間の内的世界をつなぐ媒体である。

- 。言葉は、記号的経験 (symbolic experience) という代償経験 (vicarious experience) を可能にする手段である。

人間が「生きる (living)」ということは、「自分の人生を生きる」ことと、「他人の人生を書物の中で生きる」こととの二つの意味を持って

いる。

後者を可能にする要因は本が読めることであり、その基盤となる言葉を身につけていることである。

人々は、新しく記号的経験を積む毎に、人間と事件への洞察力が豊かになってくる。

われわれが成熟した読者なら、読書のたびにわれわれは進歩する。世界が広くなり、想像力を働かせれば、さらに世界が広がる。それにつれて、われわれの頭の中の「地図」は、多くの異った状態、異った時代の人間の性格と行動の実際の「現地」のより充実したより正確な図となる。さらに、われわれの洞察力は増し、るところの人間同胞への共感性を与えるものとなってくる。

- 。言葉は、人間が環境から経験によって得た知識と感情を音声記号的再現に結晶したものである。

- 。言葉は、人間が知識を蓄積し後々の世代の人々に渡すための記号や手段である。

書かれた記号である文字や書物は、その典型である。

- 。言葉は、人間の心理的緊張を緩和、調整する手段である。

不幸な体験をしたような場合、そのことを同情的な友人や、仮想的な同情的読者、または自分自身にでも口に出して言ったり、文章に書いたりして訴えれば、耐えられるようになるものである。もし、われわれの言葉による記号化 (表現) が適切で十分であれば、不幸な体験による緊張は、言葉によって調整され、おさまってくるようになる。

誰でも知っている通り、激しく怒った時には、長々と無作法な言葉を吐き出すと気持が緩和されるということがある。

- 。言葉は、社会的なものであり、あらゆる話し手には聞き手が伴うものである。

その結果の一例として、ある発言が話し手の緊張を緩和するとすれば、聞き手にも同様の緊

- 張があれば、それも緩和されることとなってくる。
- 言葉は、詩や文学作品を味わったり作ったりすることを通して、人々に心理的健康と平衡 (equilibrium) を保たせるものである。
  - 言葉は、それを使う人々の心に魔法的なしかたで影響を及ぼすものである。
  - 言葉は、人々の考えを型にはめ、感情を通じ、意志と行動を導くものである。
  - 言葉は、生き物であり、絶えず変化しているものである。  
つまり、言葉は、静止した客体ではなく、力動的な過程である。
  - 言葉は、全て人間の経験の抽象である。  
ただし、抽象のレベルには低いレベルから高いレベルの抽象に到るまでいろいろな段階があるものである。
  - 言葉は、社会と呼ばれる相互同意の広大な網の目 (vast network of mutual agreements) をつなぐ媒体である。
  - 言葉は、人間自身の外在的秩序と内的秩序をつなぐかけ橋である。
  - 言葉は、人間が自分の経験を外在的に知るだけで満足しないで自分の見たり、感じたりしたことを自分に語らずにいられない性向を満足させる手段である。
  - 言葉は、自分の経験を一つの一貫性ある全体に秩序づける総合的活動である。
  - 言葉は、物事についての話し、話しについての話し、話しについての話しについての話し、というように色々な抽象のレベルで用いられるものである。
  - 言葉は、世界についてのわれわれの画像に秩序を与えるものである。
  - 言葉は、人間の神経体系と、その外側の何かとの相互作用 (interaction) をバックアップする媒体である。
  - 言葉は、発音、綴り、語彙、文法、文構成法等の要素から構成されるものである。
  - 言葉は、人間の経験の代数的抽象記号である。
  - 言葉は、出来事を予告したり、仕事を運んだりするために有用な抽象記号である。
  - 言葉は、言葉について定義し、説明、叙述できるものである。
  - 言葉は、低いレベルの抽象から高いレベルの抽象へ、反対に高いレベルより低いレベルへの自由な移動を可能にする媒体である。
  - 言葉は、不断の流動状態にある世界を意味のまとまりという断面毎に切り取って記号によって抽象したものである。
  - 言葉は、人間と現実の間の案内となるかわりに、障壁ともなり得るものである。
  - 言葉は、正確には、二度と同じ意味を持たないものである。
  - 言葉は、人間に時間と努力の経済をもたらすものである。
  - 言葉は、人間の持つ抑圧された心的内容を解放する表現媒体である。
  - 言葉は、人間の経験する現地の地図である。
  - 言葉は、現地ではなく、あくまでも現地を示す地図に過ぎないものである。

- 言葉は、現地や現物の抽象である。
- 言葉は、人間が自分自身について作る地図である自己概念を形づくる媒体である。
- 言葉は、人間社会の相互作用を活性化するものである。
- 言葉は、人間生存の基礎的機構に必要とされる種族内の広い協同を可能にするものである。
- 言葉は、人間の持つ神経システムの能率を高めるものである。
- 言葉は、人間の関心を広め、認識の感受性を高めるものである。
- 言葉は、使い方によっては武器とも凶器ともなり得るものである。
- 言葉は、使い方によっては、意思の不統一と衝突を起こしたり、または、それを激化させたり、協同が不可能だという信念を固めたりする働きをもするものである。
- 言葉は、知識を分かち合い、同情と理解を深め、人間の協同を可能にする手段である。
- 言葉は、人間の経験に豊かな意味と、関連性を満たしてくれるものである。
- 言葉は、人間が経験の中に何を見出すかを感知する意味のネットワークである。
- 言葉は、人間を導く外在モデルである。
- 言葉は、人間の生活の抽象モデルである。
- 言葉は、経験を意味の織り物に変える媒体である。
- 言葉は、複雑な人間性の地図を描くことのできる媒体である。
- 言葉は、意味のある経験を二重、三重に広げ、感化していく媒体である。
- 言葉は、人間の経験の抽象的、科学的一般化を促進する媒体である。
- 言葉は、人間が自身の幸福と生存のために、できるだけ多くの人から知識を得ようとし、また自分の知識に価値があると思う時にはできるだけ広く人々にそれを広めようとする際の手段である。

### 引用・参考文献

- 1 エドワード・サピア (Edward Sapir) 著 泉井久之助訳：「言語 ことばの研究 (LANGUAGE An Introduction to the Study of Speech)」全254頁、紀伊国屋書店 1957年
- 2 ジョン・B. キャロル (Carroll, Jhon B) 編 B. L. ウォーフ (Benjamin Lee Whorf) 著、池上嘉彦訳：「言語・思考・現実 (Language, Thought and Reality)」全345頁 講談社学術文庫 講談社 1993年
- 3 ルイス・マンフォード (LEWIS MUMFORD) 著、「技術と人類の発達 機械の神話 (THE MYTH OF THE MACHINE TECHNICS&HUMAN DEVELOPMENT)」河出書房新社 1977年
- 4 C. クラックホーン (Clyde Kluckhohn) 著 外山滋比古、金丸由雄訳：「文化人類学の世界 人間の鏡 (MIRROR FOR MAN)」講談社現代新書 全229頁 講談社 昭和46年
- 5 C. クラックホーン (Clyde Kluckhohn) 著、光延明洋訳：「人間のための鏡 (MIRROR FOR MAN)」全272頁 サイマル出版会
- 6 (1) フィリップ・ボック (PHILIP K. BOCK) 著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門(一) (MODERN CULTURAL ANTHROPOLOGY an introduction)」講談社学術文庫 全197頁 講談社 昭和53年  
 (2) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門(二)」講談社学術文庫 全316頁 講談社 昭和52年  
 (3) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化



- 人類学入門(三) 講談社学術文庫 全311頁 講談社 昭和52年 1975年
- (4) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門(四) 講談社学術文庫 全211頁 講談社 昭和52年
- 7 S. I. ハヤカワ (S. I. HAYAKAWA) 著、「思考と行動における言語」(LANGUAGE IN THOUGHT AND ACTION) 全299頁 岩波現代叢書 1951年
- 8 J. B. キャロル (Jhn B. Carroll) 著、詫摩武俊訳：「言語と思考(LANGUAG AND THOUGHT)」全199頁 岩波書店 1972年
- 9 F. P. ディニン (Francis P. Dinneen) 著、三宅 鴻、山中桂一、秋元実治共訳：「一般言語学 (AN INTRODUCTION TO GENERAL LINGUISTICS)」全606頁 大修館書店 1973年
- 10 J. T. ウォーターマン (John Waterman) 著、上野直蔵・石黒昭博訳：「現代言語学の背景 (Perspectives in Linguistics)」全158頁 南雲堂
- 11 ディヴィッド・E. クーパー (David E. Cooper) 著、大出 晁、服部裕幸共訳：「ことばの探究 その哲学的分析 (PHILOSOPHY AND THE NATURE OF LANGUAGE)」全422頁 紀伊国屋書店 1976年
- 12 G. A. ミラー (George A. Miller) 著、無藤 隆・久慈洋子訳：「入門 ことばの科学 (LANGUAGE AND SPEECH)」全195頁 誠信書房 1993年
- 13 International Encyclopedia of Linguistics Volume1 全429頁、Volume2 全440頁、Volume3 全456頁、Volume4 全482頁、New York Oxford [OXFORD UNIVERSITY PRESS] 1972
- 14 鈴木孝夫著：「ことばと文化」岩波新書 全207頁 岩波書店 1993年
- 15 鈴木孝夫著：「教養としての言語学」岩波新書 全239頁 岩波書店 1996年